



# 「フリーサイズ」が意味するもの： ファッションにおける多様性・公平性・包括性

すずき かずこ  
鈴木 和子

●テキサスA&M大学 社会学部 准教授

テキサスの片田舎（一番近い大都市のヒューストンまで、車で1時間半）に住んでいると、お洒落をする機会がほとんどない。特に大学では、先生も生徒も服装に無頓着な人が多い。基本は、Tシャツに短パンかジーンズ、そして足元は、ビーチサンダルかスニーカー、またはウエスタン・ブーツ。昭和生まれの私にはカジュアルすぎて、マネできないスタイルだ。かといって、フォーマルな場で、仕立てのいいスーツにネクタイをしているのに、頭にはカウボーイハット、靴はウエスタンブーツという、テキサス感満載のファッションにも未だ違和感をぬぐえない。女性は、ボヘミアン・スタイルが基本なので、ボヘミアンにあまり興味のない私が気合を入れてお洒落を楽しもうとすると、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。逆に言えば、テキサスでは、流行を気にする必要もなく、TPOにうるさくないので楽ともいえる。

それでも、衣類は消耗品であるし、娯楽が限られている田舎住まいの私にとって、周囲からあまり浮かない程度のお洒落をするのに、カタログ販売・オンライン購入は、かなり重宝である。締め切り日に追われる日々のなか、夕方帰宅時にポストをのぞいて沢山カタログが入っているのを見ると、それだけで、頬が緩んでしまう。一日の終わりに向けて、その日の気分に合わせて茶葉を選び、ソファーに転がってパラパラとカタログをめくりながら、お茶を楽しみリラックス。気に入った商

品があったら、まず印をつけておく。後日見直して、やはり欲しいと思ったらオンライン購入を決定。なんともしょぼい娯楽だが、今の私にとっては、読書の次に大切な日々のストレス解消法である。ところが、ここ半年ほど、家庭用品やガーデニング関係のカタログは楽しめるのに、衣料カタログを見るのに、段々とストレスを感じるようになってきた。その理由が自分ではっきりとわかっているのに、リラックスどころか、思ってもみなかった自分の偏狭さに、かえって猛省を強いられるという結果になってしまうためだ。

米国メインストリームの衣料品のカタログでは、スリムな白人女性を起用することが多い。これはファッション業界が、20世紀後半から現在に至るまで、長身でスリムな白人女性を美の基準として、そのようなモデルをファッション・ショーのランウェイで重用してきたことと関係している。日本人女性の平均身長より高い私にとって、日本の衣類サイズは、丈が短くて、ドレスやパンツなどは大きめのサイズを買って横幅を調整する必要があった。その代わり、フリーサイズに関しては、丈の長ささえ注文を付けなければ、着用可能である。米国に移住直後は、アメリカ人女性の平均身長（州によってかなり差があるが）よりも若干高い私は、洋服の丈で悩むことがほとんどなくなった。問題は横幅である。日本ではMサイズだったので、北米の通常サイズ展開のなかで一番小さな

サイズのXS（エクストラ・スモール）サイズになるのだが、余裕が出てしまうこともあり、細目のブランドを選択することで、日本にいた時の丈の不満が解消できた。

その後、「肥満大国アメリカ」の食生活に侵食され、さらに「質より量」をモットーとするテキサス文化に適応して、着々と体重が増加。現在ではXSまたはSサイズがピッタリという状態である。カタログ中心のブランドでは、XSとSを合わせたXS/Sサイズというのものもある。日本語で言うところの「フリーサイズ」は、英語ではone-size-fits-all（一つのサイズで、皆さんに合います）という。さすがに、このサイズの衣料の購入は、私でも多少の危険が伴う。家でごろ寝をするだけなら気にならないが、外出するにはブカブカ気味。何が言いたいかというと、日本でもアメリカでも、細かいことを気にしなければフリーサイズが一応着られる私は、ラッキーであるというか、合うサイズの服がなくて苦労している人たちの苦しみに無頓着であった。カタログやオンラインでよくみかける白人モデルは、ほぼXSかSサイズを着用しているので、白人女性モデルの顔を自分の顔に置き換えれば、自分がその服を着たときのイメージが簡単に浮かぶ。なんとも楽ちんであったのだ。

ところが、ここ最近ファッション業界でも、異変が起きている。2019年のNYファッション・ウィークでは、ランウェイに登場したモデルの44.8%が非白人種であり、人種・サイズ・年齢・ジェンダーを含め、過去最も多様性を反映したショーとなった。これまでのトークニズム（tokenism、申し訳程度の努力を見せるための体裁主義）からの完全な脱却とはいえないまでも、有色人種・トランスジェンダー・プラスサイズ・身体障害者モデルの活躍の場がひろがりつつあるのは確かである。近年では、イスラム教徒でソマリア系アメリカ人モデル、ハリマ・アデンが、ヒジャブとブルキニを纏った最初の女性として、月刊誌スポーツ・イラストレイテッド（セクシーな水着姿の女性の表紙で有名）の表紙を飾ったことが話題となった。「プロジェクト・ランウェイ」

という、無名ではあるが才能があるデザイナーの発掘を目的とする競争型の米国リアリティ番組では、積極的にトランスジェンダー・モデルやプラスサイズ・モデルを採用するように変化してきた。スリムなボディを「標準」としてデザインしてきたデザイナーたちが、くじ引きでプラスサイズ・モデルにあたり、サイズ感がわからずデザインと仕上がりに失敗してモデルにケチをつけようものなら、審査員や視聴者から非難が殺到する。「肥満は自己管理ができていない証拠」などといわれたのは、もはや昔のこと。そんなことを職場で言おうものなら、職を失いかねない。さらにはネット上で、車椅子に乗ったモデルや、戦争や事故・病気で四肢の一部を無くしたモデルまで登場するようになった。トップモデルの採用とセクシーな女性下着で有名なヴィクトリアズ・シークレットという会社でさえ、ダウン症の下着モデルの採用を発表したのはつい最近のことだ。これらは、多様性・公平性・包括性（diversity, equity, inclusivity）を重要視することを求められる社会にあって、いつまでもなかなか変わらないといわれ続けてきたファッション業界のなかでの近年の変化である。

今までのカタログやランウェイ・ショーは、米国の人種別人口構成を反映したものでないのは明らかであり、カタログ・モデルから外れる体形に当てはまる圧倒的多数のアメリカ人にとっては、スリムな白人女性が着衣した姿は、単に自分が着衣した場合のイメージを描くのに不便というだけではなく、「画一的な美」の一方向的な押し付けであると批判されてきた。現在、私の手元には、白人女性だけではなく、色々な人種かつ様々な体形の女性がモデルをしているカタログが届く。それを見て、「いったい自分にはどれが似合うのか？」という私の眩きは、サイズ探しで苦労してきた多くのアメリカ人女性たちが、長い間こぼしていた眩きであったのだと気づいた。大学で多様性や包括性の大切さを指導しながら、自分が楽しんでいたカタログの裏に隠されていたものを実際に見せつけられて、猛省しているところである。